《論文》

特別活動における主体的・対話的な深い学びのための指導方法と評価に関する研究

－「創造的な学び」による中学校での学級活動指導案の開発－

久保田治助（鹿児島大学）
土屋　雅宏（鹿児島大学附属中学校）
帖佐　尚人（鹿児島国際大学）

／論文

特別活動における主体的・対話的な深い学びのための指導方法と評価に関する研究
－「創造的な学び」による中学校での学級活動指導案の開発－

久保田治助（鹿児島大学）
土屋　雅宏（鹿児島大学附属中学校）
帖佐　尚人（鹿児島国際大学）

和文抄録：本研究は、特別活動における「主体的・対話的な深い学び」を目指した授業を行うための指導方法とその評価について検討するために、平成28年度から平成29年度にかけて鹿児島大学附属中学校で行った特別活動の授業における「創造的な学び」という評価に着目して分析を行ったものである。

附属中は、特別活動における「創造的な学び」を進める上で、〈学びのプロセス〉を踏まえることが大切になると考えた。特に、特別活動においても〈生徒にめざす「あるべき姿」〉を明確にもたせ、それに向かっていく「能動性」「主体性」（＝創造的な学び）を育成していくことに着目した。くわえて、様々な問題を解決する場面において、学習してきた知識・技能や経験を十分に生かせるように、教科や領域といった制限を超えてアイデアを関連付け、組み合わせる「独自性」も同様に育成していく必要があると考えた。

キーワード：特別活動、指導と評価、主体的・対話的な深い学び、学級活動

1．はじめに

本研究は、特別活動における「主体的・対話的な深い学び」を目指した授業を行うための指導方法とその評価について検討するために、平成28年度から平成29年度にかけて鹿児島大学附属中学校で行った特別活動の授業における「創造的な学び」という評価に着目して分析を行ったものである。

平成29年３月に公示された特別活動の学習指導要領の改正点は、おおきく①よりよい人間関係を築こうとする自主的・実践的な態度の育成、②各活動（学級活動、児童会（生徒会）活動、クラブ活動（小学校））・学校行事の目標を新たに規定したことにある。特に、学級活動では、①集団の一員としてよりよい学校生活づくりに参画、②意見をまとめるなどの話し合い活動や自分たちできまりをつくって守る活動、人間関係を形成する力を養う活動が充実されることが目指されている。さらに、言語力の育成・活用の重視として、体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実させることが目指されている。

改訂された学習指導要領第５章第１「目標」では、次のとおり示している。

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活 上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

（1）多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。

（2）集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。

（3）自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

さらに、新学習指導要領改訂での特別活動における評価の観点は、特別活動において育成すべき資質・能力という観点から３つの柱で構成されることとなっている。①生活や人間関係をよりよくするための知識・技能、②集団の一員としての話し合い活動や実践活動を通じた思考・判断・表現、③主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度、である。特に、評価にではこれまで「思考・判断・実践」となっていた部分について、「思考・判断・表現」として、「実践」から「表現」へと実践方法が他者へどのように〈表現〉されるのかに着目するように変更がなされることなった（表１参照）。それは、学校／学級集団の一員としてどのような成長がみられたかというように、各活動の結果だけでなく、そこに至る一連の過程の中でどのように取り組み、成長が見られたかということに着目することに重きが置かれている。

表１　特別活動の評価の観点

評価の観点		よりよい生活や人間関係を築くための知識・技能	集団の一員としての話し合い活動や実践活動を通した思考・判断・表現	主体的によりよい生活や人間関係を築こうとする態度
観点の趣旨	中学校	よりよい集団活動に向けた実践をする上で必要となる知識や技能を身に付けるとともに、多様な他者との様々な集団活動の意義や役割を理解している	所属する様々な集団や自己の生活上の問題を見いだし、その解決の為に話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりするために、思考・判断・表現している	様々な望ましい集団活動を通して身に付けたことを生かし、自主的・実践的によりよい人間関係を構築しようとしたり、よりよい集団生活や社会を形成しようとしたり、人間としての生き方についての考えを深め自己の実現を図ろうとしている

２．鹿児島大学附属中学校での特別活動の授業の実際

鹿児島大学附属中学校（以下、附属中）では、平成24年度から問題解決力を高めることを目的として、「創造的に考える力」や「創造的に考えようとする態度」を育成する研究を進めてきた。この中心となったテーマは「創造的」な学びとは何かということであるということである。

そのために、平成25年度からの平成26年度は、これまでの創造的な学びのための基礎的研究を基にして、「協働」の視点を加えた「協働による創造的な活動」をテーマに授業研究を行ってきた。さらに、平成27年度からは、生徒が「協働」の具体的な２つの要素として「能動性」や「独自性」を掲げ、それを「創造的な学び」として位置づけ、指導方法と評価の研究を行ってきた。そして、平成28年度から29年度にかけて、これまでの検討を総合的に分析し、授業実践を行うとともに、特別活動による評価について検討を行った。

はじめに、附属中において、特別活動をどのように捉えたのかについて概要を説明する。附属中では、改正学習指導要領において、「確かな学力」、「健やかな体」、「豊かな心」を総合的にとらえて構造化し、特別活動に

おいて育成すべき資質･能力の視点を「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の３つに整理した。(図１参照)

この図において注視する点は、中学校における〈他者〉と〈集団〉の関係をどのように捉えて行くのかというものである。「集団的役割」を理解することを目指して〈他者〉とどのように関わるのかという授業内容を目指した。そのうえで、附属中は特別活動の特質に応じ育まれる見方・考え方について、中学校特別活動における育成すべき資質・能力を表２のように整理した 。

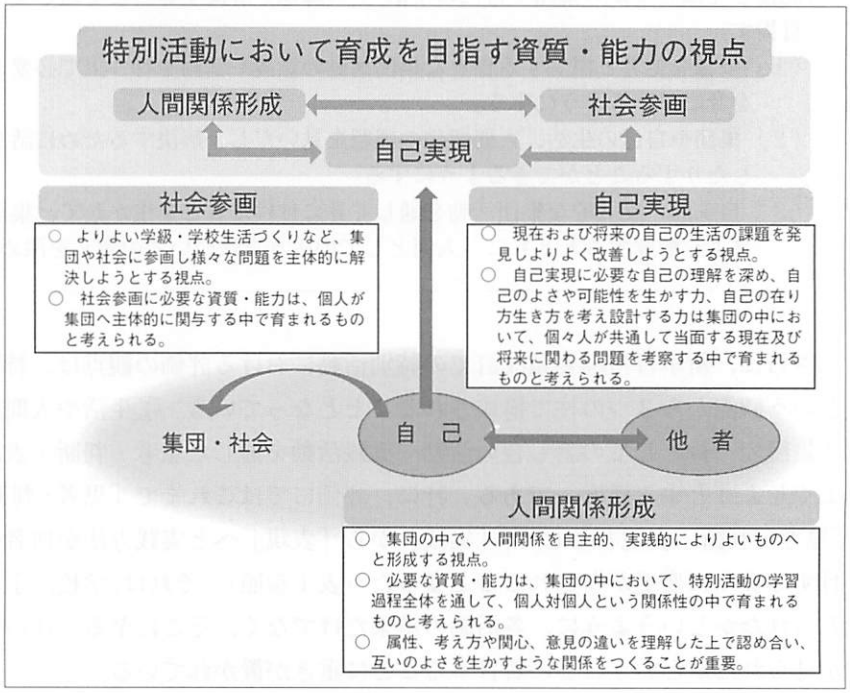

図１　特別活動の特質に応じ育まれる見方・考え方

表２　鹿児島大学附属中学校の特別活動における育成すべき３つの資質・能力

個別の知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
「何を理解しているか、何ができるか」	「理解していること・できることをどう使うか」	「どのように社会･世界と関わり、よりよい人生を送るか」
多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や、そうした実践をする上で必要となることを理解し、技能を身に付けている。	所属する様々な集団や自己の生活上の課題を見いだし、その解決のために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したり、人間関係をよりよく構築したりするために、思考・判断・表現している。	自主的･実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かし、人間関係をよりよく構築しようとしたり、集団生活や社会をよりよく形成しようとしたり、人間としての生き方についての考えを深め自己実現を図ろうとしている。

このように特別活動は、望ましい集団活動や体験的な活動を通して、豊かな学校生活を築くとともに、公共の精神を養い、社会性の育成を図るという特質がある。つまり、様々な構成の集団から学校生活を捉え、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して様々に行われる活動であるといえる。こうした特別活動の特質と、附属中が進めてきた研究は次の２点においてそのねらいを共有している。１つめには「よりよい未来（集団や学校生活を含む）」を自ら創るための創造的な学びを目指している点である。２つめにはそうした創造的な学びを実現するために各教科等における「見方・考え方」を総合的に活用して問題を発見するとともに、その中で異質な他者と望ましい人間関係を築きつつ、協働して新たな価値を作り出すことを重視している点である。

学びのプロセス		活動内容	資質・能力（例）	
①	問題発見・確認	学級活動：学級や自己の生活の諸問題を、話し合い等を通して発見・確認し解決の見通しをもつ。 学校行事：話し合い等を通して行事の目標や計画、内容の見通しをもつ。	○　情報の収集・整理等を通し、学級や学校、地域・社会の課題を発見する力 □　自己の課題に気づく力、自己の適性を把握する力 □　目標を設定する力	◇よりよい人間関係を育むための思考力・判断力・表現力等
②	解決方法の話し合い	それぞれの活動において、問題の具体的な解決方法や自己実現のプロセス、活動の具体的内容や役割分担などについて話し合う。	○　集団活動における自己の役割やその定義についての理解 ○　協働して問題を解決しようとする態度 □　生活を改善したり、将来を見通して自己の生き方を選択したりできる力	
③	解決方法の決定	それぞれの活動において、話し合い活動で具体化された解決方法等の中から合意形成を図り集団決定したり、自己決定したりする。	○　合意形成を図る力、責任ある行動をとることができる力 ○　課題解決に向かおうとする情意や態度 ○　よりよい生活をつくろうとする態度 □　日常の生活を改善する力、自己の在り方を改善することができる力、意思決定する力	
④	決めたことの実践	それぞれの活動において決定した集団や自己の行動について責任をもって実践する。		
⑤	振り返り	それぞれの活動において実践を定期的に振り返り、意識化を図るとともに、実践の継続や新たな課題の発見につなげる。	○　希望や目標をもって現在の生活を改善しようとする態度 ○　よりよい生活をつくろうとする態度 □　学級や学校の中で自分のよさや可能性を生かそうとする態度 □　自己を生かせる生き方や職業を主体的に選択しようとする態度	
		次の課題解決へ		

図２　特別活動における学びのプロセス

そこで附属中では、特別活動における学びのプロセスを「主体的で対話的な深い学び」の視点で構成した。（図２参照）ここで附属中が考えた「深い学び」とは、習得・活用・探究の見通しのなかで、教科等の特質に応じて育まれる見方・考え方 を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解や資質・能力を育成 するとともに、学習への 動機付け等につなげることを意図した学習活動を指している。したがって、特別活動において「深い学び」を実現させるためには、各教科等において育まれる見方・考え方を日常生活につながる実践的な場面において、効果的に活用させることが大切と捉えた。その理由は、特別活動における学びのプロセスを、主題に対して興味を喚起して学習への動機付けを行い、目の前の問題に対して、必要となる知識や技能を獲得し、試行錯誤しながら解決に向けた学習活動を行い、自らの学習活動を振り返って次の学びにつなげることを意図したものと附属中は考えたからである。

上記の観点から、この「深い学び」は、附属中がテーマである「創造的な学び」との関連性を掲げ、目的として、「現状」が「あるべき姿」になることを阻んでいる要因を把握した上で、課題を設定し、他者のアイデアと比較しながら、自分の知識・技能や経験を組み合わせて解決し、新たな価値を見いだし、自ら将来を切り拓くことを目指した。

したがって、附属中は、特別活動における「創造的な学び」を進める上で、図２に示す学びのプロセスを踏まえることが大切になると考えた。特に、特別活動においても〈生徒にめざす「あるべき姿」〉を明確にもたせ、それに向かっていく「能動性」「主体性」（＝創造的な学び）を育成していくことに着目した。くわえて、様々な問題を解決する場面において、学習してきた知識・技能や経験を十分に生かせるように、教科や領域といった制限を超えてアイデアを関連付け、組み合わせる「独自性」も同様に育成していく必要があると考えた。

これらのことから、附属中では、特別活動の学びのプロセスにおいて、生徒の「能動性」「主体性」および「独自性」に注目し、具体的な手立てを講じて、重点化した指導を行えば、「創造的な学び」がより充実したものとなり、自らよりよい未来を創る生徒の育成につながるのではないかと考え、研究を行った。

3．附属中の授業研究の仮説

附属中では、特別活動の授業研究において「学級活動」に焦点を当てた。そして、研究テーマである「能動性」と「主体性」を発揮させる「創造的な学び」を進めるために、以下のような検討を行ってきた。

はじめに、「実践」の捉え直しである。特別活動とは、学級活動・生徒会活動・学校行事において様々な構成の集団に所属する立場から学校生活を捉え、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して様々に行われる活動そのものである。また、その中で培った資質・能力は、社会に出た後の様々な集団や人間関係の中で生かされていくものでなければならない。そのために〈学校と社会の接続〉（＝実学）という特質が特別活動にはあり、「実践」が大切であるとされてきた。しかし、教師、生徒双方において学びのプロセスにおける「決めたことの実践」という実際の行動場面だけを「実践」と捉える傾向があることには注意すべきである。「決めたことの実践」だけでなく、むしろその前段階である「問題発見・確認」や、「振り返り」の場面にも生徒の学びの機会は多く含まれている。こうした一連の学びのプロセスそのものを「実践」と捉えさせることによって、更に能動性を発揮させることと考えた。

これらのことから、附属中は特別活動において能動性、主体性を発揮させるために、以下の３点が必要であると考えた。①育成すべき資質・能力を念頭に置き、各活動の意義や役割を明確におさえた上で、学びのプロセスを系統的かつ継続的に生徒が実践できるようにすること、②この学びのプロセスにおいて生徒自身に集団の一員であるという自覚と責任を持つための手立てを具体的に行い、自己肯定感、自己有用感を育成していくこと、③特別活動において育成すべき資質・能力である「社会参画」の視点から、集団に属する個人が集団へ寄与しているという実感をもたせる〈振り返り〉（単なるフィードバックではなく、〈社会〉と〈個人〉のを接合する〈内省〉）の機会を設けること、である。

以上を踏まえて、附属中では教師が生徒の学びと社会とのつながりを常に意識し、意図的・計画的な指導を適切に行い、生徒との寛容で積極的な関わりをもちながら研究・実践を行うことを重視した。

4．「創造的学び」の評価を行うための研究方法

附属中学校における特別活動のテーマである「創造的な学び」の特徴は「能動性」「主体性」であるが、この２点は主に研究内容の主眼となるもので、すべての特別活動の授業において行われるものである。それにくわえて、「独自性」という様々な問題を解決する場面において、学習してきた知識・技能や経験を十分に生かせるように、教科や領域といった制限を超えてアイデアを関連付け、組み合わせるものを「学級活動」において発揮させることで、新学習指導要領の目標にある育成すべき資質・能力の中に「多様な他者と協働する様々な集団活動」を達成できるとともに、それぞれ多様な教育方法を生じさせることができる。

この「多様な他者と協働する様々な集団活動」とは、一人一人が互いのよさや可能性を発揮できるような活動を示している。これについて附属中学校は、個性を抑圧する同化を求める〈集〉ではなく、〈個人〉が「独自性」を保持しつつ他と協調できるような開かれた集団において展開されると捉えている。そのうえで、附属中では特別活動の学習過程が、①-ａ〈集団〉と②-ａ〈自己〉の２つの軸として、①-ｂ〈学級全体や学校全体での活動〉と、②-ｂ〈一人一人が考える活動〉の両方が組み合わさって展開される活動とした。その理由として、学級として課題を見いだし、取り組んできたことを振り返るに当たって、学級全体でどれだけ達成できたかという視点と個人として自らが活動し、学んだことを内省する視点の両面から実感させることが必要になることを挙げている。

したがって、附属中は特別活動において「独自性」を発揮させるためには、以下の２点が必要であると考えた。①学びのプロセスにおける「解決方法の話し合い」の場面で、よりよい人間関 係を育むための思考・判断・表現を重視した活発な話し合いをさせる工夫を行うこと、②「振り返り」の活動場面において、学校での学びをどのように自己に生かすのかという自己を見つめさせる手立ての工夫を行うこと、である。

これらの仮説のもとに、附属中では特別活動の評価をもとに「学級活動」において、創造的に考える力や考えようとする態度を評価するために、「ルーブリック」による評価を行うことにした。ルーブリックとは、成功の度合いを示す数段階程度の尺度に対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語からなる評価基準表のことである。具体的な生徒の姿を予め想定し、妥当性のある尺度を基に見取ることを可能にしている。そこで、学級活動においても学びの段階を質的な表現で区切っているICEモデルを用いたルーブリックを用いることで、生徒が創造的に考える力や考えようとする態度を発揮する姿として質的な表現で見取ることができると考えた（表３参照）。

表３　鹿児島大学附属中学校のICEモデルを用いたルーブリック

	Ｉを達成している段階	Ｃを達成している段階	Ｅを達成している段階
質的な表現	質的な表現取り扱う内容や課題を理解し、話し合いの意義を見いだし、様々な立場・視点から意見を述べる段階。	質的な表現課題を時間による変化、つながりや構造として捉えて、取り扱う内容における最適な解決策を導き出す段階。	質的な表現生徒会活動や学校行事等、教科や学級活動の授業の場から離れて、日常の場面で実践できる段階。

ICEモデルとは、スー・ヤング・Ｆ等が始めた開発・実践されてきた評価モデルで、ＩはIdeas（基礎知識）、ＣはConnections（つながり）、ＥはExtensions（応用）を意味している。問いに対してどのように答えるかによって、Ｉ・Ｃ・Ｅのどの段階にいるかを評価する視点である。日本では、「深い学び」の手法として近年各種学校において広く用いられている手法である。

ルーブリックでの評価は、昨年度の各教科におけるＥ（応用）段階が教科外である特別活動において発揮できているかについて分析できるものである。これは、生徒が各教科等の特質に応じて育まれる見方や考え方を総合的に活用することであり、特別活動において育成すべき資質・能力の３つの視点である「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」と関連付けることができる。

これらのことから、各教科や道徳の時間、学校行事との関連を図ったり、生徒による自己評価及び相互評価の機会を設定したりして、ICEモデルを用いたルーブリックによって、特に独自性を発揮して創造的に考える力や考えようとする態度を見取り、生徒へのフィードバックを図ることで 指導と評価の一体化につなげることなると附属中は考えた。

５.「創造的な学び」を発揮させるための評価

学びのプロセスを重視した学級活動の工夫として、「学級活動」において、大きく２つのテーマを焦点にした。１つめは、共同というテーマである。例えば、学級という人間集団に関して、学級内のまとまった意思決定を集団で決定し解決していく展開が考えられる。２つめは、共通というテーマである。例えば、一人一人の抱える問題の中に存在し、その集団において共通するものであり、生徒一人一人が取り組み、自己の決定を行う展開が考えられる。そこで、これらの学級活動の展開に対応できるような「学びのプロセス」を確立し、各プロセスの意義を明確にすることにした（表４参照）。

表4　鹿児島大学附属中学校の本校における学びのプロセス

1 問題の発見・確認	学級や学校におけるめざすべき姿と比較して、集団生活上の諸問題に気付き、その中から議題や課題を決定・確認し、話し合いの計画を立て、解決に向けて自分の考えをもつ。
2 解決方法の話し合い	よりよい生活をつくるための課題の原因やシステム、具体的な解決方法、役割分担などについてグループで話し合う。
3 解決方法の決定	話し合い活動で具体化された解決方法等の中から、グループや学級全員で合意形成を図ったり、個人で意思決定したりする。
4 決めたことの実践	決定した解決方法や活動内容について責任をもって全員で実践する。
5 振り返り	話し合いや実践を振り返り、意識化を図るとともに、結果を分析し次の課題解決に生かす。また、実践の継続や新たな課題の発見につなげる。
6 次の課題解決へ	

本時を学級活動の授業とし、事前と事後の活動を含めると、表5のような指導計画の流れのパターンが考えられる。パターン1では、主に学級や学校における生活づくりの参画や一人一人のキャリア形成と自己実現に関する内容を取り扱う。パターン2では、日常の生活や学習への適応と自己の成長や、健康安全に関する内容を取り扱う。また、学びのプロセスにおける2、3における話し合いについては以下に示す図3の「話し合いのプロセス」を設定して深めていきたい。

表5　取り扱う内容による指導計画の流れ

	事前	本時	事後
パターン1	①	②③	④⑤
パターン2	①②	②③④⑤	④⑤

1 ・話し合いのテーマを理解する。
2 ・テーマについて自分の考えをもつ。
3 ・考えや意見を発表する。
4 ・他者の意見を聞く。
5 ・相互に意見交換や質問をし合い、多様な意見等を比較・検討する。
6 ・自分や集団の考えを見直し、深める。
7 ・集団では合意形成を行ったり、自己の意思決定を行ったりする。

図3　鹿児島大学附属中学校の本校における学びのプロセス

具体的には、図4のような「話し合いの約束」というシートを用いて、全員に配布して活用している。その理由は、これまでの研究で行ってきた知的コミュニケーションを視覚化し具体的に教育方法について検討ができるからである。さらに、チームリーダーに対して目的や条件について確認し、解決へ向かって練り上げていく視点とプロセスを明確にさせることで、具体的な学びのプロセスを様々な教育活動の場面において繰り返し行わせることによるチームのコミュニケーションスキルの向上が見込まれる。

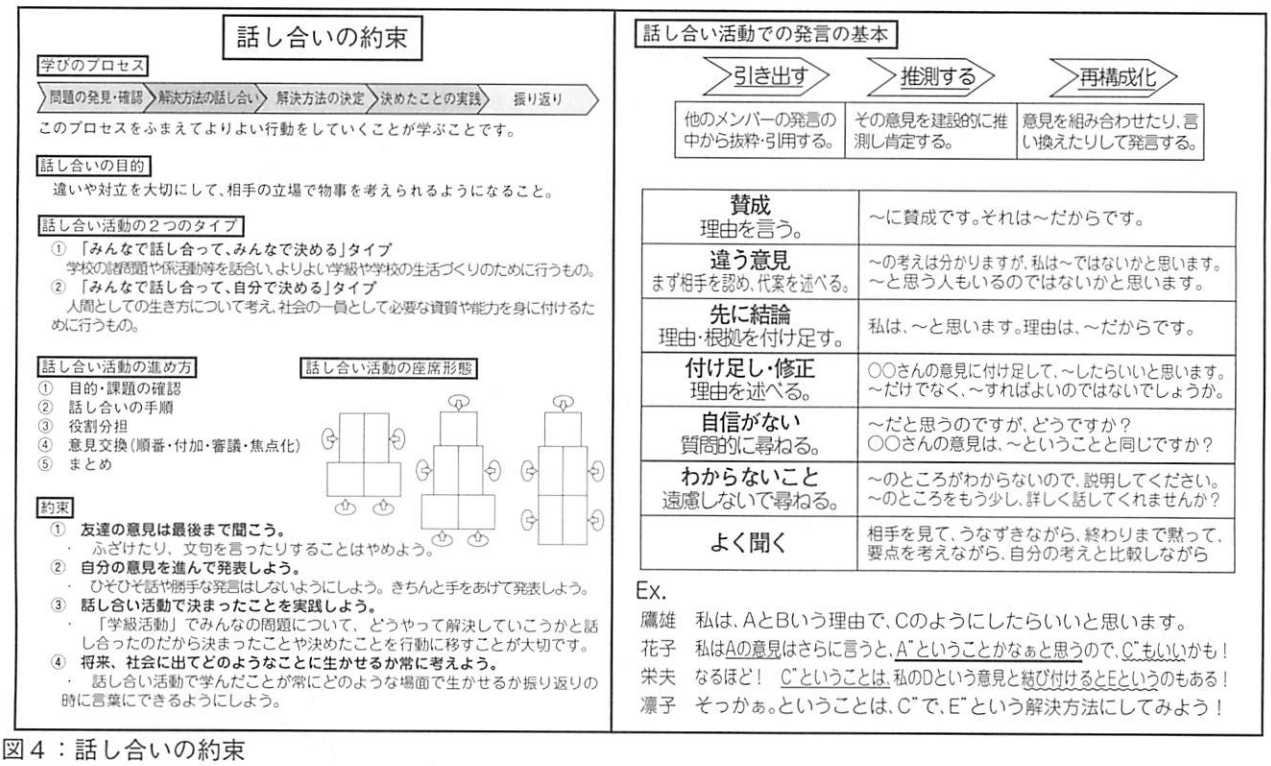

図４：話し合いの約束

さらに、話し合いの方法については、話し合いの内容やプロセスに応じて、その方法を意図的に選択させている（表６参照）。

表６　テーマについて自己の考えや意見をもつための方法

○テーマについて自己の考えや意見をもつための方法	
・スケーリング	（対象を適切な数値に置き換えて表す。）
・リストアップ	（項目ごとに当てはまることをできるだけ多く箇条書きする。）
・ウェビング	（連想した言葉、関連のある言葉を次々につなげて図示する。）
・チェックリスト	（質問に○や×、数字、記号などで答える。）
・グルーピング	（与えられた基準、もしくは自分たちで考えた基準によって、いくつかの項目に分類する。）
○相互に意見交換や質問をし合い、多様な意見などを比較検討するための方法	
・ランキング	（各自の価値観に基づいて話し合い、グループとして順位を決める。正解はなくてもよい。）
・ロールプレイ	（ある設定の基で、ある役割を演じたり、役者の陰の声として話してみたりする。ロールプレイ後にはシェアリングを行う。）
・グルーピング	（与えられた基準、もしくは自分たちで考えた基準によって、いくつかの項目に分類する。）
・ウェビング	（連想した言葉、関連のある言葉を次々につなげて図示する。）

しかし、実際には授業において可視化しにくい生徒の創造的に考える力や考えようとする態度が発揮されている姿を見るために、先述しているICEモデルを用いた評価をくわえている。そこで、学級活動における創造的に考える力や 考えようとする態度を、以下のようなルーブリックを作成して個々の実践や振り返りにおける具体的な姿として見取ることにした（表７参照）。

表7　鹿児島大学附属中学校のICEモデルを用いたルーブリック

	Iを達成している段階	Cを達成している段階	Eを達成している段階
質的な表現	質的な表現取り扱う内容や課題を理解し、話し合いの意義を見いだし、様々な立場・視点から意見を述べる段階。	課題を時間による変化、つながりや構造として捉えて、取り扱う内容における最適な解決策を導き出す段階。	生徒会活動や学校行事等、教科や学級活動の授業の場から離れて、日常の場面で実践できる段階。

学級活動においては、このように質的な表現によって、創造的に考える力や考えようとする態度について見取ることにした。つまり、質的に生徒たちの考えやその変化を見取っていくことによって、生徒たちの「独自性」を把握し、適切なフィードバックを行うことで指導と評価の一体化を図ることができると考えた。このルーブリックにより、話し合い中に生徒の思考を把握することによって、教師がどのように支援するかが明確になる。

質的に見取ることで、生徒の思考を把握することができ、より具体的な支援策を組み立てることができる。また、生徒自身がルーブリックによって自己評価することで、話し合いが拡がり、深まっていくこと考えられる。

さらに、思考・判断・表現を重視した活発な話し合いを行わせるために、生徒の思考を拡大、深化させるという特長をもった「システム思考」に注目した。この「システム思考」を授業設計や話し合いの思考ツールとして利用させることが有効であると考える。この「システム思考」とは、ものごとを一連の要素のつながりとして捉え、そのつながりの質や相互作用に着目する「ものの見方」である。問題となる対象をいくつかの構造をもつシステムとして捉えて、問題解決を図ろうとする考え方も意味している。主に、全体最適化や複雑な問題解決への手法としても応用されるものである。本研究は、この思考ツールとしての「システム思考」を特別活動における問題に対して応用することで、一面的な見方を避け、安易な解法に頼ることなく根本的な問題解決方法を導き出すことになると考えた。「システム思考」を導入する具体的なメリットは3つである。①複雑なシステムを大局的に把握するものの見方を習得できる、②要素のつながりをどのように考えるかが明らかになる、③私たちが無意識にどのような基準でものごとを見ているのかが分かりやすくなる、という点である。なお、そのために「氷山モデル」を使用して授業を行い生徒自身により可視化によって、「能動的」「主体的」に自己評価ができるようにしている（図5参照）。

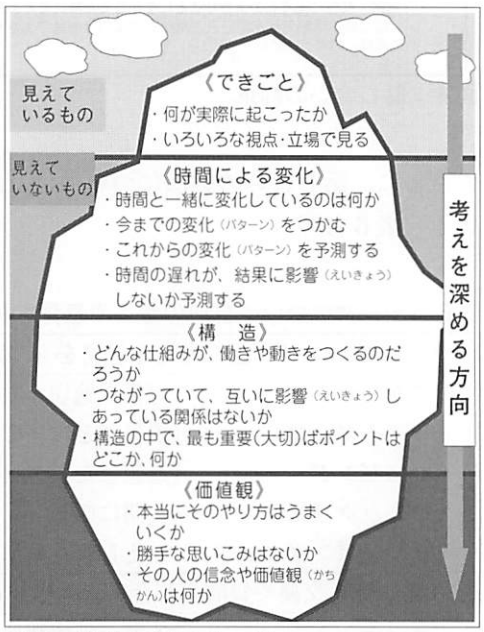

図5　氷山モデルカード

実際に行った本時の指導と生徒の活動は以下の通りである。

ア　題材「自分と友達を大切にした主張ができる方法を考えよう」

イ　本時のねらい

ロールプレイや意見交流を通して、話し合い活動を行い、アサーションのポイントを見付け、実際に表現できる。

ウ　展開

過程	活動の内容	指導上の留意点	めざす生徒の姿
活動の開始 6分	1　前時の授業内容を振り返る。（全体）	・　前時に学習したアサーションをその後の生活で実践できたか振り返らせる。 ・　自分も攻撃的な主張をしている時があった。 ・　自分の考えをうまく言えない時もあった。	◎　本時の話し合いの意義を理解し、課題を見いだしている。
	2　社会の実態を知り、課題を確認する。（全体）	・　求められる人物像や若者の「人間関係」について現状等のグラフと、自分自身の現状とを関連させながら課題を発見・確認させる。 ・　どうしたら自分の考えをうまく相手に伝えることができるだろう。	
	3　課題を設定する。（個・全体）	※Ⅱ－１（２）	
	よりよい人間関係を築くために、どのように伝え合えばよいのだろうか。		
活動の展開 34分	4　場面を理解し、再現VTRを視聴する。（全体）	・　身近な学校生活の中から取り上げ、自分の課題として考えさせる。	◎　本時の話し合いの意義を理解し、進んで活動しようとしている。
	今週、当直当番のあなた。今日は下校後に予定があり、早く帰りたい。放課後、当直の仕事を急いで行っていたとき、さっききれいに並べたばかりの机に、教室を出ていこうとしているCさんのカバンがあたり、机の位置がずれてしまいました。Cさんは最近、放課後に残っていることが多く、前にもそういうことがあったのでイライラしてしまいました。その時、あなたはどのように伝えますか？		
	5　本時の場面設定におけるアサーティブな表現（台詞）を考え、ペアで共有する。（個・ペア）	・　学級の現状を踏まえた場面を提示し、アサーティブな表現を個人で考えさせる。 ・　生徒にアサーティブな表現のよさを感じとらせるために、モデリングを行う。 ※Ⅰ－２、※Ⅱ－２（２）	◎　他の生徒の意見を尊重して考え、自分の意見を適切に表現している。
	自分：「わざとじゃないだろうけど、ぶつかってずれた机を元に戻してもらえる？」 相手：「あ、ごめんなさい。」 自分：「ありがとう。気をつけて帰ってね。」		
	6　考えた台詞が、本当に自分と相手の気持ちを大事にした、アサーティブな表現になっているか再考し、練り上げる。（個・グループ）	・　自己課題を解決しようとしている表現になっているかを考えさせる。 ・　目に見えない部分（相手の立場。時間軸で考えているか）をシステム思考（氷山モデル）で用いたVTRで整理させる。 ※Ⅱ－２（２）	
	7　個人で考えた表現でロールプレイを繰り返し実践し、互いの表現について感想・アドバイスを伝え合う。（グループ）	・　相手の気持ちを大事にした上で、自分の気持ちもしっかり表現することが最重要ポイントであることをおさえる。	◎　最重要ポイントをおさえている。
	自分：「今、机がずれちゃったんだよね。いつも放課後残ってるけど、何かあるの？」 相手：「実は部活動で友達とケンカをしてしまって。」 自分：「そうなんだ。それはつらいね。私に何かできることはある？」 相手：「ううん。大丈夫。」 自分：「そう。私も今日は急いでて当直の仕事早く済ませたいんだ。だから、机を一緒に戻してくれない？」 相手：「ごめん。気付かなかった。僕が戻すよ。」 自分：「ありがとう。友達と早く仲直りできるといいね。さようなら。」		◎　アサーティブなやりとりが表現できている。
活動のまとめ 10分	8　学んだことを振り返り、実践に向けての意欲をワークシートに記入する。（個）	・　実際に起こっていることの背景で最も大切なものは何かを考えさせ、ワークシートに記入させる。 ※Ⅱ－２（３）	◎　意欲的に実行しようとしている。
	9　次の時間について予告する。（全体）	・　主体的な活動を呼びかけ、これからの生活で実践し、生活記録に貼付するシートに記入していくことを伝える。	

7．おわりに－成果と課題－

以上、特別活動における「創造的な学び」のための指導の方法と評価について、附属中の研究授業をもとに検討してきた。研究授業自体としては、①学びのプロセスを意識させ、社会とのつながりを意識させ、自己課題を設定させる教材の工夫を行うことで目的が明確になり、能動性を発揮する生徒の姿が見られた、②システム思考を用いた手立ての工夫により、思考・判断・表現を重視した活発な話し合い活動に拡がりと深まりが見られた、といった効果が見られたと言える。しかし、特別活動における評価としては、全国的な授業実践を総括的に分析する必要あると言える。したがって、地域的特性など多くの検討すべき多角的要因の全体的マトリクスを明らかにすることが重要である。

今後の課題としては、ICEモデルを用いた創造的に考える力や態度の評価が、特別活動における評価として応用できるのかについて検証や、各教科が横断的に「見方・考え方」を総合的に活用できるような、カリキュラムマネジメントと、創造的に考える力や態度を育成するためのプログラムの明確化が挙げられる。

参考文献

Peter M. Senge『学習する組織―システム思考で未来を創造する』英治出版、2011年。
Sue Fostaty Young・Robert J.Wilson原著、土持ゲーリー法一監訳、小野恵子約、主体的学び研究所編『「主体的学び」につなげる評価と学習方法』東信堂、2013年。
ドネラ・H・メドウズ『システム思考をはじめてみよう』英治出版、2015年。
国立教育政策研究所『特別活動の評価の観点』（案）、2016年。
国立教育政策研究所『特別活動 学級・学校文化を創る特別活動（中学校編）』2016年。
祚磨昭孝『ICEモデルで拓く主体的な学び』東信堂、2017年等参照。

Study on Teaching Methods and Evaluation for Active and Interactive Deep Learning in Special Activities
: Development of Teaching Guidance for Classroom Activity at Junior High School by "Creative Learning"

Harusuke KUBOTA
Masahiro TSUTIYA
Naoto CHOSA

This is a study on teaching methods and evaluation to conduct lessons of "subjective and interactive deep learning" in special activities.

From the year 2018 to 2019 I analyzed classes of special activities at Kagoshima University attached junior high school focusing on "creative learning".

In particular, it is necessary to study along three themes of "activity", "subjectivity" and "identity" in special activities.

It is necessary to cultivate "active" and "subjectivity" with students having clear goals. In "uniqueness", it is necessary to combine ideas beyond the restrictions of subjects in order to make full use of learned knowledge, skills and experience.

Key Words: special activities, guidance and evaluation, deep interactive learning, classroom activity